



えと文
 黒田明比古

冬の日

氷のようなすどい空気があたりをおおい
 外出するのも苦痛であるが、今日も、モンパ
 ルナスのカフェースに足を運んでしまった。
 ここに通い初めて数年の時がたっている。
 別に音楽があるでもなし、コーヒーがうまい
 のでもない。

テラスから見える風景にも変化はない。
 ただ、ここに座って外を見つづけているの
 である。

今、私の隣に一人の老人が居る。
 静かに外を見つめて藤のいすに、ふかぶか
 と座っている。

きつと彼は、彼の若き日からここに、この
 ように座り外を見つづけてきたのだ。

彼には戦争も恋もあつたはずだけれど……

老人は私の未来の姿であるだろう。

たとえ私の上に多彩な人生がおとずれると
 しても。

カフェースにて

(昭和四十三、大文卒・画家・在パリ)